

魔法の言葉 プロジェクト 活動報告書

報告者氏名: 高野 嘉裕

所属: 大分県立日田支援学校

記録日: 2018 年 2 月 10 日

キーワード: コミュニケーション、実態把握、VOCA、支援の過不足

【対象生徒の情報】

・学年

高等部 2 年生

・障害名

知的障がい、脳性まひ、てんかん

・障害と困難の内容

○表出できる言葉は少なく、筋緊張から表出にも努力を要する。ジェスチャーなどのサインもいくつか有しているが、一つのジェスチャーがその時々で意味を変えて表出されることもあり、この理解には支援者や受け取る相手の理解が必要である。

○肢体不自由で、日常的に車いすを使用しており、生活の全てにおいて支援を要する。車いすの操作なども難しく、脳性まひによる筋緊張から体の可動について難しい部分が多い。

○言葉を聞いて理解する力は高く、授業や教員からの言葉かけについて「Yes.No」によって意思の表出をすることができる。

【活動目的】

・当初のねらい

○学習目標について

・今年度の学習目標としては、適切な実態把握を行うと同時に、本人が有用と思えるコミュニケーション手段の拡充を考えた。識別、マッチングなどの能力を高めながら、場面や環境の設定により、本当に自分にとって必要だと思えるコミュニケーション手段の獲得、そして、そこにタブレットなどが有用に活用できるのではないかと考えた。

・また、写真を撮影することを非常に楽しみに感じていることから、本人が撮影した写真を素材とした活動を計画した。しかし、iPad 等での撮影は、緊張や腕の可動域などを考えると、困難な面もあるため、操作等のアクセシビリティを活用しながらより簡単に撮影ができる方法を探った。

○学習目標

・自分の思いや考えを伝える楽しさを味わうことにより、自ら伝える気持ちを高めたり、方法の拡充・選択ができたりするようになる。

・ワンタップで答えが出せたり、音声なども確認できたりする教材を用いて、コミュニケーション手段の獲得に必要と思われる、マッチングや弁別などの基本的な力を身に付けることができる。

・実施期間

2017 年 5 月～ 2018 年 2 月

・実施者

高野 嘉裕

・実施者と対象児の関係

担任

【活動内容と対象生徒の変化】

・対象生徒の事前の状況

- ・ 有意な発語は3～4語(主に家族の呼び名)、数種類のハンドサインを持っているが見慣れるまでは本人が伝えたい言葉を支援者や周りの人が把握することは難しかったり、同じハンドサインでも意味が異なるものもあり、支援者がくみ取らなければ伝わらなかったりするものがある。
- ・ 文字の理解はほぼできていないことや、意味理解をしているシンボル数も少ないために、自分から表出する手段が少ない。これまでは保有するコミュニケーション手段で過ごすことができていたが、それには支援者や相手が、対象生徒の伝えたいことを強くくみ取ろうとする気持ちが必要である。
- ・ 対象生徒については、小学部・中学部の時と関わる機会があったが、その際に上記のように汲み取ることで興味のあることや簡単な会話が可能であった。このことから、本人の内言語についてや、言葉などの理解度の高さについても可能性を感じる部分があった。
- ・ コミュニケーションについてあまり大きな困りを感じていないようにも思える。学校という限定された中での生活において、なんとかなることや、汲み取ってもらえることによる困りの少なさは、将来を見据えた時に、そのまま困りとならないとは言い切れないと思う。だが、このことは支援者によってはコミュニケーションの成立が難しいとも考えられるのではないかと。 どのような人でも、場面でも「伝わるコミュニケーション」を可能にする力を得ることや、そのための支援が必要であると考えた。このことから、伝わらない場面の設定や、伝わって嬉しい場面の設定をしていくことで、本人の困りを明確にしていきたいと思う。より伝わりやすい「担任」を介してのコミュニケーションを意図的に減らすことで、本人が困りを実感してくれたり、そこから伝えることができたときの喜びを身をもって感じたりすることで、本人にとって新しい表出手段となっていくと考える。これは、環境の設定についても及ぶことであり、自分が困った時にすぐに解消できることや、支援者先導の解決にならないようにすることで、自分で解消することの達成感を感じられるようにしたい。
- ・ 高等部2年生という段階で、将来の生活を考えた時に、より容易に伝えられ・伝わるコミュニケーション手段の獲得が必要と考えた。このことから、まずは実態把握の徹底に努めていきたいと考えている。マッチング能力、色等の認識・判別能力、そして視力や視野についても、実態を見ている限りしっかりと把握をしておく必要があると考える。

・活動の具体的内容

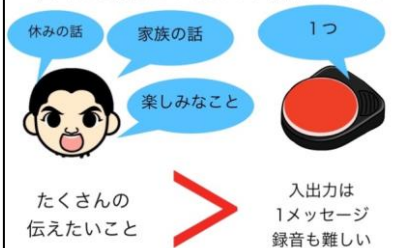
- ・ まずはコミュニケーションの部分について、ビッグマックを使用して、簡単な言葉の発声を自分でできるかということについて取り組みを行った。

ビッグマックを使って歓迎の言葉



自分で行う＝自分でできる
押しやすい＝簡単
押す→発語＝因果関係

本人の言葉とVOCAの機能のずれ



成果

- ・ VOCAの意味も理解しており、録音の際には「自分の声も入れたい(自分の言葉)」というような意欲も見られた。

使用に伴い見えてきた課題

- ・ ビッグマックは、一つのメッセージしか録音できず、本人の持っている言葉の多さとズレが見えてきた。

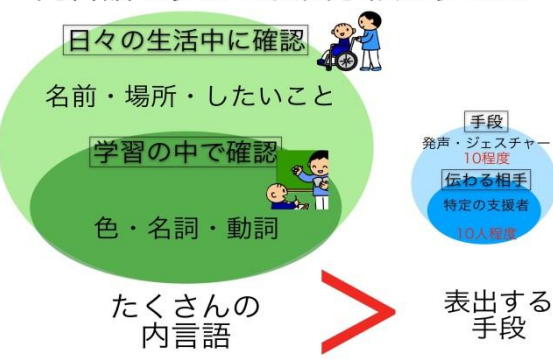


就学奨励費でiPadの購入

- ・ 取り組みの様子を家庭と共有→保護者の理解
- ・ 自分のツール→将来的にも使用可能なツールとなる

上記の取り組みからの「内言語の多さ」と「表出手段の少なさ」という部分については、日々の生活の中で友だちや教員、家族などの名前、学校内外の場所の名称、本人がしたい事（動詞につなげる）などについて、

内言語の多さと表出手段の少なさ



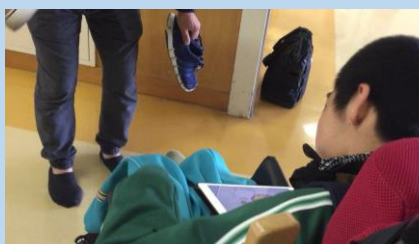
本人が有している言葉を確認するようにした。また、個別学習の中では色や名詞、動詞など学習部分から本人の有している言葉を探るアプローチを行った。この結果「本人の言葉の理解度」と「内言語の豊かさ」に比べ、表出手段の少なさというのは明確になった。この部分を明確にすることにより、ビッグマックからの移行を考えるようになり、これら情報を含めた保護者との話し合いを行った。高等部になると就学奨励費による ICT 機器の購入補助が行われることもあり、保護者も現在と将来を含めた本人の意思表出を考え iPad の購入をすることとなった。

まず、以下の2点について取り組みを行うことにした。

① コミュニケーションの困難さについて

取り組み初期

まずは挨拶をとおして、やり取りの楽しさを感じてもらおう！



課題

・やり取りを意識しすぎて、担任が声をかけたり、タイミングを伝えたりする部分が多くなってしまった。

反省から

・担任が必要以上に出ていくことは、本人にとって本当に成功体験として残るのだろうか？
・これまでと変わった事は、担任が代わりにいうか、iPad が代わりにいうか・・・

最初の取り組みから

反省点

- ・結局、担任が声をかけている...
- ・結局、担任が操作している...
- ・結局、担任がタイミングを決めている...

↓
音声 iPad になっただけ

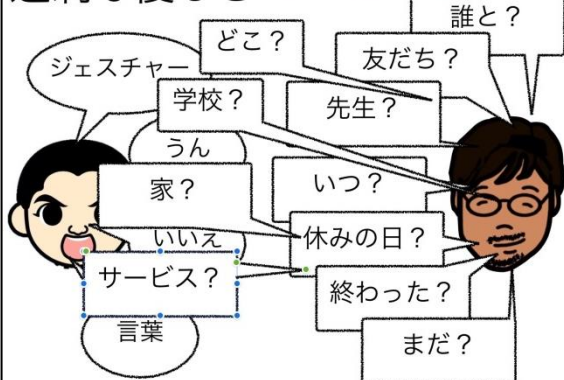


→ これまでの状態に困っていない

やり取りの成立を意識しすぎるあまりに、本人が発声するタイミングを作ってしまった（担任が他の教師に声を掛けてしまう）。成功体験は非常に大きな経験になると思われるが、「できなかった」という経験や「なんでかな？」という疑問が湧き上がった瞬間もまた、学習のきっかけになると思う。受け身な部分が多いと思われる対象生徒のコミュニケーションにとって、「失敗のない・・・」というようなこれまでの支援とは異なる取り組みも必要であると思われる。そして、この部分では、非常に印象的な出来事があった。「iPad ではなく、自分で話す」と発言したことである。これは本人が「自分は言葉を発して、伝わっている」と思っているのではないかとこの状況は、本人の少ない表出からすべてを聞き出そうとして、様々な質問を投げかける支援者の気持ち・優しさが生じさせてしまったと考える。これまでの周囲の関わりが生んだ「過剰な優しさ」による誤解が原因としてであると予想した。

この部分をあえて一言「わからないよ」ということで、対象生徒にとって必要な困りが生じることとなり、そこから彼は自分にとって必要なものを考えてくれるはずである。

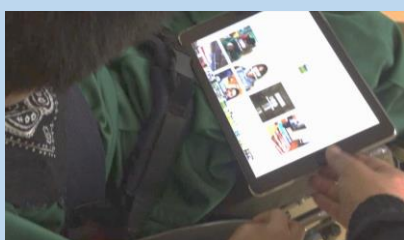
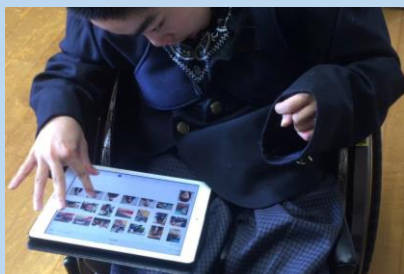
過剰な優しさ→意欲や機会を埋没させる？



②本人の動きの困難さについて

取り組み初期

本人が使用している机や、膝の上において使用。操作が困難だったり時間がかかる部分に、手を出したりしてしまっていた。



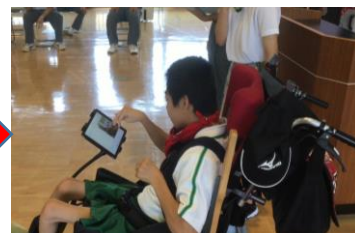
課題

- 本人が使用するタイミングを教員が判断してiPadを手渡していた。
- 操作が複雑な項目であったり、よく使うアプリへのアクセスに時間がかかる、または誤操作が多い場合などは、本人に確認しながらも、教師が操作を手助けしてしまう事が多かった。

第2段階

タブレットを車椅子に固定できるアームを準備。常時、本人の手元にiPadがある状態に。

このことで、誰かに支援してもらうための端末という意識から、自分で操作し使用する端末としての意識への変換をねらった。



また、設定を変更して「アクセシビリティ」「AssistiveTouch」により両手での操作や、物理的なボタンの押下、複雑な操作が必要な項目を、タップのみで操作可能となるようにした。



細かい指の動き
両手での操作が難しい

操作が難しい項目は
アシスティブタッチで

手を動かすのは時間がかかる

よく使うアプリを手前に

肢体不自由という部分では、動きの困難さということがiPadを自分のものとしていく時に、きちんと検討するべき点であった。「常にあるもの、自分のツールとしてあるもの」という点を意識できてから、その活用が進んでいくのではないかと感じた。

・段階的に自分で考え表現できるように



DropTalk はバージョンアップに伴い、非常に細かな設定が行なえる VOCA アプリに進化したと思われる。タップして発声すると次のキャンバスへリンクで飛んだり、キャンバスの数が一つ・二つなど異なる数のキャンバスを、同一の流れの中に設定できたりもするようになった。成功体験を積み上げたい場面、自分で考え選択して発声する場面など、生徒の実態やその時の環境に応じて準備ができるようになり、対象生徒も活き活きと司会や発表に取り組むようになった。また、DropTalk には設定画面により、タッチダウンでシンボルを読み上げる（タップしたら読み上げ）↔通常（タップして離したら読み上げ）を切り替える事ができたり、クラウド設定を行うと、学校と家庭でのシンボルやキャンバスの共有も簡単にできたりするなどを行うことができる。これらの機能を用いて様々な場面でのコミュニケーションを行ってきたが、やはり「自分の言いたいこと」と「言わなければならない事（司会、進行）では、モチベーションに差が出ることが見えた一つの「言葉」があった。

「夏休みの楽しみなこと」というこのボタンは477回も発生されている。しかし、司会などの「言える・できる」というためのボタンは平均しても10回程度。これが、言葉に対するモチベーションではないかと感じた。

このことをきっかけに、本人が操作しやすく自分が伝えたいことを伝えやすくできるものはないかと考え、DropTalk のスケッチキャンバスを用いた「デジタルコミュニケーションボード」の作成を行った。これには、現場実習での卒業生との出会いなど、多くのヒントが関わっている。

同じ言葉のようで違う



自分が伝えたいこと
477回

言いたい 伝えたい

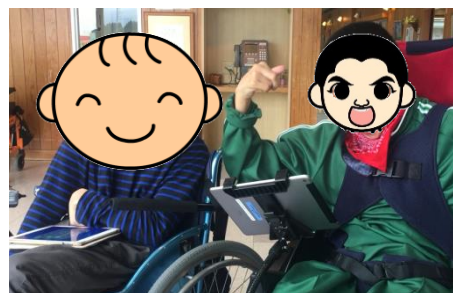


司会などの言葉
平均10回

言える できる



コミュニケーションカードを用いて、自由に話をする卒業生



iPad の「メモ」に自分の考えを打ち込み、伝える卒業生

表出できる内容の拡充



表出できる内容をさらに広げるために、自由に話したいことを話せるようなキャンパスの作成を行った。友だちや教師の名前、場所はもちろん本人が話したいトピックや、その時の学習にかかわるものも含めるようにした。それぞれは簡単に入れ替えや追加・削除が可能である。不必要なキャンパスやボタンを伝えてくる姿も見られるようになった。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

今年度の実践から Try & Error & Improve



今年度の取り組みは、左の図のような経過で進んできたと思う。本人の困りにアプローチし、そこから反省点や課題を見出し、より良い方向へと支援を進めていく。このより良い方向とは、決して困りを解決するだけではなく、自己理解を進めたり、次のステップへ進めたりするために、必要な困りを意図的に発生することも含めている。今に満足するために必要な支援ではなく、将来的に必要なと思われる力を身につけるための支援はどのようにあるべきかを考える実践となった。

現在では、対象生徒は自分の端末としての意識も高まり、最近では自分が活用するために必要な「スピーカー」を探してほしいと、本人から依頼があった。デジタルコミュニケーションボードは、デフォルトの画面のようになり、操作する力や理解の向上から、コミュニケーションボードで補いきれないシンボルに関しては、自分でキャンパス⇄ライブラリの切り替えも行なって探している。伝わった時に、身体を力いっぱい伸ばして喜ぶ姿は、本当にうれしそうな様子が伝わってくる。

・エビデンス(具体的数値など)

Droptalkログ機能

少  >  >  多



6月 2,281回



7月 2,241回



8月 596回



9月 1,551回



10月 1,993回



11月 7,833回



12月 897回

総発語数は17,392回 89日間 195/日
コミュニケーションボード内の発語は
1,237回 24日間 51/日

数値的な結果で言えば、上記のログが本人の言葉を発した回数を表している。使用を開始してから、毎月コンスタントに発声をしていることがうかがえる。11月に非常に数が増えているが、これは学習発表会でもiPadを使った発表をしたためであり、練習で何度も繰り返し言葉を発した結果と思われる。本番では、突如欠席した生徒のセリフまでカバーしてくれるという事もあった。

・その他エピソード(画像などを含めて)

その他の取組
自分で見る・調べる、修学旅行のしおり

自分で見える修学旅行のしおり
iBooks iBooks Author

楽しみながら修学旅行のしおり
スケジュールなども確認したい

しおりを見る
しおりをみる

学習スライドも含めて
デジタルしおりを作成→iPadに
いつでも見る、めくれる

自分で見る・調べる、修学旅行のしおり

肢体不自由という事から、細かい操作や複雑な操作は難しい対象生徒にとって他の友だちが使っているような紙媒体のしおりは、使いにくい。そのためパソコンで「iBooks Author」を使用し、タップやスワイプで操作できるデジタルしおりを作成。ページ内にはリンクなども含め、情報を得ることもできるようにした。

その他の取組
メールをいつでも読める

メールをいつでも読める
写真
みてほしい

メールでの交流
写真
みてほしい

文字で
メールを送る操作
いつでも

届いたメールは、読み上げ機能を使って録画
写真を含めた動画としてアルバムに保存

いつでも
見ることが
可能

自分のメールを、いつでも読めるものに

対象生徒にはメールのやり取りをしている知り合いがいた。文字への興味が高まればと考え、この活動のサポートをしていたが、やはりメールなどは本人の物で、いつでも読めるものにと考えた。送られてきた写真と、読み上げで音声化したメールをiMovieで動画にし、アルバムへ。いつでも読めるメールとした。

その他の取組
自分で鳴らす楽器演奏

学習発表会で演奏することに
楽器を大きな音で鳴らすことができれば

楽器を鳴らす
大きな音で鳴らす

VOCAで楽器の音
スピーカーで音を大きく
道具にセルロースをつけ反応するように

画面に触れる部分と、持ち手の部分
にセルロースをつけている

デジタルでもアナログの雰囲気大切に(楽器演奏)

本校の高等部は毎年、和太鼓などの演奏がある。この中で「ちゃんちき」という楽器の担当になった。和太鼓の中では埋もれてしまうため、iPadとスピーカーで音を大きく簡単に演奏ができるようにした。また、指でタップするのではなくセルローススポンジを巻いた撞木を使用し、楽器演奏の雰囲気を大切にした。

その他の取組
見えにくい部分も見える

梨の成長を追いかける学習
受粉、袋掛け、収穫を体験

見えにくい部分も
遠く場所でも見る

FaceTime
中継

遠くても、高くても見える

地域の中での学習として「梨の一年」を体験する学習の中では、車いすであることから、木になった小さな梨の果実や、それが大きくなったものなどを見ることが難しい。高い部分でも手元でしっかりとみることができるよう「FaceTime」を使用して、その場ですぐに中継をすることができた。

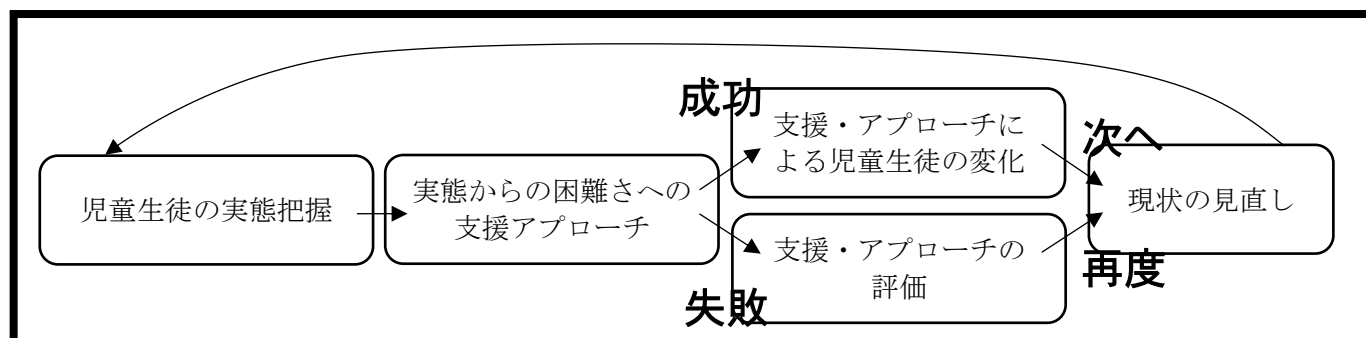
実践からの考察

今年度の実践は、これまでの知的障がいという部分から、肢体不自由という部分が多くを占める内容になった。その中で ICT 活用、タブレットの活用を実践しながら困難さのある児童生徒に対する支援の在り方や、ICT 機器の活用の仕方を再考することができた。

・児童生徒の実態を把握する

児童生徒についての実態把握は主観的（児童生徒に対応しながら感じたことや見えてきたこと）な部分と客観的（様々な検査方法による結果のみならず、記録としての画像や動画、他の教員による把握）な部分があると思う。実態把握は指導や支援において重要な部分である。

児童生徒の成長や変化に伴い、その実態も変化してくるため、常に実態把握を行うことは必要な事であると思われる。



・支援の不足と過剰

支援を必要としている児童生徒に対して、教員として最大限できることはしたいと常に考えてきたが、それが本当に適切な支援であるとは限らない。実態に基づく部分とも絡んでくるのであるが、支援の不足はもちろん、過剰な支援が児童生徒の成長や気づきを得る場面を奪ってしまうこともあるということを感じた。そして、将来を見越した時に、本人が必要とする力、本人が置かれる環境、これらのことを踏まえながら、今の環境や学習を設計していく必要性を再度感じる一年であった。

